

中級課題の教え方

2020.5.24 第二回オンライン定例会

藤坂龍司

<中級課題の特徴>

中級課題の特徴の一つは、様々な概念を教えること。

初級では、具体物の名前付けが中心だった。

中級では、

大小、多少、長短、高低、熱冷、重軽 などの基本的形容詞

上、下、横、前、後ろ などの位置の概念

動物、果物、乗り物、野菜 などの分類概念

数 =アカデミックな概念

など様々な抽象的概念を教える。その一つ一つが、発達に遅れのある子どもたちにとっては大変な難関である。これをいかにして効果的に教えるか。

Point 1

難易度の違いを知り、比較的簡単なものから取り組むこと。

物の命名

動作の命名

形 (♥、☆、○、△) △と□の区別は難

色 (赤、黄色、緑、青、黒、白、ピンク、オレンジ)

人 (ママ、ばあば、じいじ、兄ちゃん、姉ちゃん、本人) パパとママの区別は難

場所 (家の中の場所 (トイレ、お風呂、台所、玄関、階段)、外の場所 (公園など))

分類 (動物、果物、乗物) 果物と野菜は難

位置 (自分基準、物基準、上下、横、後ろ、前の順)

基本的形容詞 (大小、長短、多少、熱冷) 重軽は難

数 (まず1、2、3の量の概念から)

性別・世代 (お兄ちゃん、お姉ちゃん、おじいさん、おばあさん)

経験的から言って、だいたいこの左から右にかけて、難易度が上がっていく。

形のなかでも、より具体物に近い☆や♥が理解しやすく、□と△の違いは理解しにくい。

場所は、外の場所より、家の中の場所の方が理解しやすい。家の中では、トイレやお風呂など、シンプルで役割が子どもにもわかりやすいところがよい。

判断を誤って難しい方から教えてしまうと、いつまで経ってもクリアできないことになる。

Point 2

教材の工夫：①他の点はすべて同じにし、②肝心な属性の違いだけを強調する。

①大小

色形が全く同じで大きさだけがはっきり違うものを2つ用意する。

例：同じ銘柄のシャンプーの大とミニ、大きいボールと小さいボール

②熱い冷たい

全く同じ透明なグラスを二つ用意し、一つには40～50℃のお湯（やけどさせないため）を、もう一つには約0℃の冷水（氷を入れて冷やしておき、氷を取り出す）を、同じ量だけ入れる。

二つのグラスを外から握るか、中のお湯（冷水）に指をつけさせ、「どっちが熱い？」「どっちが冷たい？」

③重い軽い

不透明な入れ物を二つ用意し、一つには重い物を入れ、もう一つには軽い物を入れる。

Point 3

簡単にはあきらめない。一つの教材、一つのやり方でうまく行かなかったら、別の教材、別のやり方を試す。

例：自分の娘に重い軽いを教えたときのこと、

最初は10cm四方の四角い缶二つを用意して、片方に鉛、片方に紙粘土を入れて、二つを持たせて比べさせた。しかし重さの違いには気が付かなかった。

ほかにもいろんな教材を工夫。

最終的には二つの手提げ袋に、片方はセメントの袋を入れ、もう片方には綿を入れて、同じように膨らませ、見た目を同じにした。重すぎて持てないので、床において、手で引っ張らせた。それによってよく違いを理解した。

Point 4

大量試行に耐えるだけの、子どもの集中力と持続力を養う。

一つ概念を理解するには、通常、たくさんの時間と試行数（特にランダムローテーション）が必要。

ロバース博士は、一つ概念を教えようと決めたら、その訓練に、1日あたり正味1～2時間、1分10試行として、600～1200試行を費やした、と述べている（『自閉児の言語』77頁）。

しかもその時間、子どもの集中力を維持しなければならない。3、4試行したらすぐにぐずりだしたり、一回お菓子をもらったら、すぐに立ち上がろうとするようでは、中級課題は克服できない。

だから初級のうちに、10試行のランダムローテーションに慣れさせておこう。

・新しい課題をクリアする成功経験をたくさん積み重ねること。そのためには、無理のない、適度に難しい課題を常に供給する必要がある。それを上手にスモールステップ+プロンプト+強化でクリアさせていくと、子どもに自信と、課題への興味、大人への信頼感が生まれる。それがいい状態。

Point 5 対概念を教えるときは必ずもう一方の概念も教える。

娘が2才半のとき、大小を教え始めました。私はまだ早いと思っていたのですが、気のせいた妻が先に導入してしまい、いくら教えてもわからないので、それを見かねて、私も教えることにしたのです。

妻は大小のつみきで教えていましたが、私はもっと大きさの違いを極端にすべきだと思いました。そこで特大のミッフィーのぬいぐるみを買ってきて、それと小さいミッフィーで教えることにしました。1997年の年末のことです。

しかも私は、「大きい」と「小さい」の両方を同時に教えるのは難しいだろうから、まず「大きい」だけを教えよう、と思いました。娘は、小さい方のミッフィーを「うさぎ」と言ったり選んだりすることはすでにできていたので、それはそのままにして、「大きいうさぎ」と言えば大きい方のうさぎを選べるようにすればいいだろう、と考えたのです。

その作戦は、しばらくはうまく行っているように思えました。私が「おっきいうさぎ」と言うと、娘はそれが左右どちら側にあっても、必ず大きい方を選ぶようになりました。そしてその直後に「これ何？」と聞くと、「おっきいうさぎ」と言うようになりました。さらに小さい方のうさぎを指さして「これ何？」と聞くと、「うさぎ」と言いました。私は「うまく行きそうだ」と思いました。

ところがさらに1、2日経つと、娘は小さい方のうさぎを見せても「おっきいうさぎ」と言うようになりました。つまり娘は大きい方のうさぎを「おっきいうさぎ」と教えられ、言わされているうちに、こいつらはどっちも「うさぎ」であり、しかも「おっきいうさぎ」とも言うんだな、と理解してしまったようでした。

私は壁に突き当たりました。それで「大きい」だけ教える路線はあきらめ、大きいうさぎと小さいうさぎで、「大きい」「小さい」と言ってランダムで選ばせる正攻法に改めました。

しかし娘は数日やっても理解しませんでした。どうやら大きい方のミッフィーが巨大すぎて（娘よりも大きかったのです）、全体が把握できないように思えました。私はミッフィーを使うのをあきらめました（たしか数千円はしたと思いますが）。

私は教材をフォーク（のちにはスプーン）に変えて、マッチングから始めることにしました。スプーンやフォークは家に大小の物が何本もあったので、大きいフォークと小さいフォークをテーブルに置き、子どもにもう一本の大きいフォークを渡して、大きい方と一緒にさせたのです。小さいフォークは小さいフォークと一緒にさせました。するとこれはランダムで出来ました。

次に名前付けに入りました。マッチングも「大きい」「小さい」と言いながら、大きいもの同士、小さいもの同士一緒にさせていたのですが、今度はテーブルの上に大きいフォークと小さいフォークを1個ずつ置いて、「大きい」と私が言って子どもに大きい方をさわらせ、「小さい」と言って小さい方をさわらせました。最初はプロンプト。そしてフェーディング。交互からランダムへ。基本通りの教え方に戻っ

たのです。

祈るような数日間が過ぎ、娘の正解率が上がってきました。ついにある日（1月15日でした）、朝のセラピーでランダムで12試行中10試行正解しました。その日の夜のセラピーでは、大小のボールでも、7試行連続正解しました。うさぎでも10試行中8試行正解しました。どうやらついに大小の概念を理解したようです。

そのことを妻に報告したときの誇らしい気持ちを、今でも覚えています。

なんだか、思い出話に流れてしまいました。私が言いたかったのは、大小を教えるのに、「大きい」だけ教えてもあまり役に立たない、ということです。子どもは大きくて目立つ方を選べばいいんだな、と思っているだけで、「小さい」と言われても大きい方を選んでしまうでしょう。あるいは私の娘のように、「大きいうさぎ」を「うさぎ」の別名、あるいは新しい呼び方、と勘違いしてしまうかもしれません。

それで終わらせないためには、どうしても「小さい」を導入する必要があります。「大きい」と言ったら大きい方を、しかし「小さい」と言われたら小さい方を選んで初めて、「大きい」とは何を意味するかが分かっている、と言えるのです。